

# 森林研修所ニュース

平成26年1月

No.67



## 年頭所感

森林技術総合研修所長 木下 喜博



新年あけましておめでとうございます。

今年は、2月にロシアのソチで冬のオリンピック、6月からサッカーのワールドカップブラジル大会などスポーツビッグイベントが催されます。スポーツと言えば、昨年、2020年オリンピックの東京開催が決定されました。今ひとつ盛り上がり欠けていた招致ムードが俄然活気づいたのは、ロンドンオリンピックにおける日本人選手の活躍でした。今後、東京オリンピックでの活躍選手の輩出を目指して、各競技団体あがての人材育成が行われていくでしょう。

スポーツのトップ選手の育成としては、今シーズンも大活躍を続けている男女フィギュアスケートの全国有望新人発掘合宿、通称「野辺山合宿」と言われる選手育成システムが特筆されます。これは、潜在能力があり、将来有望な少年少女を発掘し、様々な特権を与えながら国際試合などの経験を積ませトップ選手に育成していくシステムです。長野オリンピックに向けての選手強化を目的に始まったものですが、現在まで続けられており、今日の日本選手活躍の基盤となっています。

翻って、林業の世界を見ても、森林・林業の再生のため人材育成が急務であると言われています。林業生産活動のそれぞれの場面で活躍する現場技能者から森林総合監理士等の技術者まで、幅広い人材育成が求められています。効果的な人材育成のためには、トップアスリートの育成と同様に、目標が明確であるとともに、トレーニング（研修）と経験を効果的に組み合わせた育成システムの整備が重要です。そして何よりも活躍の場が与えられ、本人のやる気が継続できるような環境が重要であることは言うに及びません。

当研修所も森林・林業の人材育成の一翼を担っている責任を踏まえ、今年も研修生は元より関係各般からの研修ニーズに応え、より効果的な研修の企画・実施に職員一同精一杯取り組んでいく所存でありますので、皆様方のご理解とご支援をよろしくお願い致します。

# 高性能林業機械作業システム研修を受講して

佐賀県佐賀中部農林事務所林務課 近藤 真奈美

4月に普及指導担当になったばかりの普及1年生の私に、上司と同僚が強く参加を勧めたのがこの「高性能林業機械作業システム研修」でした。この研修は初心者向けではなかったのに躊躇していましたが、私に選択の余地はなく同僚達にほぼ強引に参加を決められました。

同僚達は「座学が少なく現場が多いから退屈しない!」「いろんな機械に乗れる!」、だから“絶対楽しい”と断言するので、多少不安はありましたが、とにかく楽しんで研修を受けようという前向きな気持ちで受講しました。



高性能林業機械作業システム研修にて  
スイングヤーダを使った実習の一コマ

研修は、スイングヤーダを使用した架線集材作業のシステム検討と実践が主な内容でした。先柱となる木の選木からベルトスリングの巻き方、ブロックの取付け、ガイラインの選木から設置、策張り、スイングヤーダのリモコン操作等、業務上ではなかなか体験しない現場作業を体験しました。これにより、現場に応じた機械の選択や配置、作業の順番、作業員の労働強度の軽減を図るような作業段取り等を自分なりに考えることができるようになりました。

職場では、同僚達が『架線集材は難しくてよく分からない』といった声をよく耳にします。

私も実践機会が全くなく苦手意識が強かったのですが、現場の実践を通じて、架線集材に対する苦手意識が薄れただけでなく、組合や事業体の方々と少し現場レベルの話ができるようになり自分に自信ができました。



チェーンソーを使った伐倒実習の様子

今回の研修は、現場経験の少ない私にとってまさに「百聞は一見にしかず」で、今後の現場指導を行う上で非常に貴重な体験となりました。今後もこのような研修の機会をとらえて、自分の経験値を向上させ、現場での指導につなげていきたいと思えます。

わずか10日間の研修でしたが、全国から集まった研修生の方々の仕事の話をするなど非常に充実した時間を過ごすことができました。

共に研修に励んだ研修生の皆様、研修所職員の方々、講師の方々に対し感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



# 高性能林業機械作業システム閉講

林業機械化センター



9月25日から10月4日の10日間、研修生9名が受講し、森林の立地や施業の諸条件に適応した、安全かつ効率的な高性能林業機械作業システムの定着及び架線集材システムを将来的に推進定着させることを目的とした「高性能林業機械作業システム」研修を実施しました。

この研修では、地域の指導普及に携わる者に必要とされる「指導・助言」に必要な知識の習得を重点に置いたカリキュラム構成とし、研修生自ら高性能林業機械作業システムについて、構築、検討・検証、評価まで実践してもらいました。

また、労働安全衛生の向上に資するため、安全作業等に重点を置いた講義も強化しました。

指導・助言に必要な知識として、実際に森林施業を実施している林業事業者の方を講師として招き、現場に即応した指導や助言ができるよう現場での安全作業や安全確保のポイント等の講義を行っていただきました。



林業事業者講師による講義



サイクルタイム計測

作業システムの実践・評価として、実習林において「森林作業道の検討・検証」、スイングヤードを使った「高性能林業機械作業システムの実践・評価」、残存木の被害低減のための集材作業等の検討を行う「環境負荷低減方策」を実施しました。

生産性の把握と作業システムの評価に必要な知識として、集材作業のサイクルタイム計測をする「生産性把握の実践」、その計測を基に、教室で生産性の把握や、

作業改善のポイントの洗い出し等を行う「生産性の算出と評価」を実施し、最後にコストに係る専門的知識を学ぶ「コスト算出法」を受講し研修を閉講しました。

このように、この研修では、高性能林業機械作業システムの効率的・効果的な機械・人員の配置等、事業者等の機械装備や要員、現地の状況に応じた作業システムの選択等まで、実際に研修生が現場で体験することにより、より実践的な指導・助言ができる内容の濃いものとなっております。

研修生からは『現場で事業者へ指導できるようにこの研修で学びたいという希望を持ってきた。実際に作業システムを実践することで、システムを検討することの難しさ、林業の過酷さ、危険やリスク等が体験でき勉強になった。机上では学べない貴重な事を学べたと思う。』などのコメントをもらい、研修生自らの知識や技術が向上した研修であったと確信しているところです。



生産性の把握と評価

## 森林保護管理Ⅱ（獣害）研修を受講して

愛知県 農林水産部 農林基盤担当局  
森林保全課 森と緑づくり推進室 福田 麻子

今年度から病虫獣害を担当しています。これまで獣害とは縁遠い地域で業務をしていたため、基礎的な知識や全国の状況を学べるチャンスだと思い、研修に参加することを決めました。

5日間の研修のうち、3日間はシカとクマの生態や森林被害を中心とした講義、2日間はくくりわなの設置の現地実習及びグループ討議を行いました。

講師は国家公務員、研究所職員、県職員、民間企業と、異なる立場から獣害に立ち向かっている方々で、多方面からの知見・経験を惜しみなく提供してくださいました。獣害対策は各種の法律・制度が関係しているほか、人によって獣害に対する捉え方も大きく異なっており、被害を低減させるためには多くの壁を越える必要があります。その壁を越えるためには、シカ・クマの生態をよく調査して計画に活かすこと、広域的な連携が欠かせないこと等が深く印象に残りました。



最終日、グループ討議の様子。  
「地域における獣害対策の現状・課題及び対応策」がテーマ。

現地実習では、実際にわなの仕掛け方をご指導いただくとともに、偶然にもわなにかかったシカの止め刺しに立ち会わせていただくことができました。目の前で見たのは初めてだったので少なからずショックを受けましたが、その反面、動物と自然を相手にする重みに気が引き締められました。

グループ討議は、各地域における獣害対策について共通の議題を設定し、活発に議論したことで新たな解決策も生まれ、非常に刺激的な時間となりました。

今回の研修で得た、基礎的な知識・最新の情報・新しい経験を活かして、これからも獣害対策に取り組んでいきたいと思えます。

このような貴重な機会を与えてくださった研修所の皆様、講師の皆様、そして研修をより活発なものにくださった受講生の皆様に、心より感謝いたします。ありがとうございました。

# 地域にあったシカ対策の実施に向けて

## ～森林保護管理Ⅱ（獣害）研修～

教務指導官 福嶋 貢史

近年、シカやクマによる森林被害が深刻化していますが、特にシカについては分布域が拡大するとともに、植栽木の食害や下層植生へ大きな影響を及ぼしています。

この研修は、シカやクマの生態を理解し、被害対策や個体数管理について学び、地域にあった被害対策の企画ができる者を養成することを目的に10月28日から11月1日までの5日間実施しました。（研修生28名）

研修カリキュラムは、主にシカ被害対策に関する内容としました。

大きく分けると、①シカ対策の現状・課題の把握、②各地の取組事例の紹介、③くくりわなによる捕獲の方法（現地実習）、④グループ討議（シカ対策の検討）に分けられます。

被害対策の取組事例は、最近の捕獲・防除の技術開発の状況、静岡森林管理署（誘因捕獲：シャープシューティング）や神奈川県丹沢地域の取組を紹介しましたが、シャープシューティングは映像を交えての講義となり、まさしく「百聞は一見にしかず」となりました。



くくりわなの実習風景

また、くくりわなによる捕獲実習は「どのような場所に、どのように設置すればよいか」をポイントに群馬森林管理署の指導の下、国有林において行いましたが、シカが通る箇所の見極めやわなの隠し方等捕獲の難しさを改めて認識できたかと思えます。

研修のとりまとめとして、最終日にはこれまでの講義内容等を踏まえて、シカの被害対応策についてグループ討議を行いました。短い時間の中ではありましたが、議論の内容や考えた解決策は今後の現場での被害対策の検討に当たって役立つものと考えます。

シカ被害対策は喫緊の課題でありますので、この研修で学んだことを現場で実践し、地域にあった効果的な対策が確立され、シカ被害の減少の一助となることを期待します。



# 森林技術者ステップアップ研修を受講して

福岡県森林林業技術センター 専門技術指導員 木下 能成



林業家としての新たな発想  
(西川林業地にて)

この研修は、森林技術総合研修所のほか、埼玉県、群馬県、山梨県、長野県と場所を変え、魅力的な講師陣から現地で直接講義を受けることができる新しいカリキュラムです。

時代の最先端の情報を5日間で収集できる貴重なチャンスであり、このような機会は他にないと考え参加させていただきました。

講義では、「自伐林家が地域林業を再生させる」「優良林業地の持続的経営に学べ」「木育で需要拡大」「母船式木流システムで地域木材の安定供給を図

る」「木を100%使ってバイオマス社会を実現」「森林整備＝水の確保が飲料企業の生命線」「地域資源を最大限活用しよう」など、地域と森林・林業の方向を示す「ヒント」に溢れていました。

講師の先生方の活躍する分野は異なるものの「地域を変えたい、森林と林業を元気にしたい」という熱い想いと情熱があり、大きな衝撃を受けました。

研修を通じて私自身が、日頃業務で追われ一方的で視野が狭まっていること、さらに自分の無知を改めて知らされました。まずは技術の基礎をしっかりと頭に叩き込むことが大切であり、自分の地域をもっと知るとともに、色々な考え方を理解し、そして知恵を出しまとめて「企画にする力」が必要であると感じました。

「できない理由を考えるな！」東泉社長の言葉どおり、私たち森林技術者は、今こそ前に進むことが求められています。閉塞感のある森林・林業・木材産業界を打破するためには、視点を変え、広げ、発想を柔軟にする必要があります。研修で学んだものを日常業務に必ず活かさなくてはならないと思います。

最後に、今回の研修では全国の国有林・都道府県職員、森林総研の方々など、職場環境や立場も違う森林技術者の仲間と交流することができました。ご指導していただいた講師、研修所、研修生の全ての皆様との素晴らしい出会いに心から感謝を申し上げます。

森林技術者としてのステップアップの機会を与えるこの貴重な研修が、今後も引き続き開催されることを期待しています。



経営戦略を語る東泉社長  
(右から二人目筆者)



# 森林技術者としてのステップアップを目指して

教務指導官 高木 敏

本年度全く新しい研修コースとして、森林技術者ステップアップ研修（研修生21名）を11月に行いました。

当研修所で行う研修は治山や林道、森林施業、生物多様性といった担当業務と直結した専門分野を対象としたものが多いのですが、今回のこのステップアップ研修は担当業務に必ずしも直結したのではなく、職員の発想・企画能力向上、意識改革を促すために、森林・林業全般を横断的に学ぶものです。

森林・林業に係る先導的な取組についての講義や現地研修等を通じ、既存のスタイルにとらわれない、斬新な発想とそれを実現する企画力を習得し、幅広い視野を持って施策の企画・立案等が可能な技術者を育成することを目的としたものです。そのため、研修生の多くが普段聞くことの少ない企業、村役場、NPO等の独創的で先進的な事例、国の政策とは対極に位置する取組を含め新鮮でバラエティに富んだチャレンジングな講義内容となりました。



企画力を高めるためには…  
(グループ演習)

## 主なカリキュラム

自伐林家から発想する林業の再生	(NPO法人土佐の森・救援隊 中嶋健造氏)
西川林業 木の良さを伝える	(きまま工房「木楽里」主宰 井上淳治氏)
時代を先取りした大規模製材の経営戦略	(株)トーセン代表取締役社長 東泉清寿氏)
企画力を高める／自己啓発	(マネジメントコンサルタント 平井ゆき子氏)
総合飲料メーカーによる森林整備への挑戦	(サントリーHD エコ戦略部チーフスペシャリスト 山田健氏)
川上村の挑戦 山村活性化を実現した行動力	(長野県川上村産業建設課長 山中光雄氏)



地域の宝「カラマツ」を活かす  
(長野県 川上中学校にて)

また、「日々の膨大な業務に追われ、事業展開に結びつくような企画を考える余裕もなく、新しい取組を提案しても、企画を実現させるための効果的なプレゼンが苦手で職場の理解が得られない。そのため、やりたい仕事ができない。」と思い悩む職員も少なくないと考えられることから、企画を実現する能力を身に付けるために「企画力」「自己啓発」について、マネジメントコンサルタントの平井ゆき子氏から演習を中心にした講義をしていただきました。

業務におけるステップアップは、一朝一夕にはいかない大変難しいものですが、講義や現地研修のほかグループ討議など多くの人と意見交換を行ったことにより、「視野が広がる」「意識が向上する」といった変化が生じ、研修生の日常からの脱却への動機付け、起爆剤となり、森林技術者としてステップアップするきっかけになれば、研修担当者としてうれしい限りです。

最後になりますが、研修生の皆さまの今後の益々のご活躍をお祈りします。



水こそ生命、「天然水の森」づくり (サントリー白州蒸留所にて)

# BALDWIN



THE BALDWIN LOCOMOTIVE WORKS  
PHILADELPHIA  
54511  
U.S.A.  
FEBRUARY, 1921

## B型客車15号の修復について

よみがえれポールドウィン実行委員会

よみがえれポールドウィン実行委員会（内田章会長）は2006年7月に発足し、林業機械化センターで保存されているかつて森林鉄道で活躍していた車両を後世に末永く残すことを目的とした塗装修復、保存、維持管理等に必要な作業を手掛けている団体です。私達は、名前のおりポールドウィン3号機（蒸気機関車）の力強く走る姿が現実となることを信じて日々活動しております。

2013年からは、木曽森林鉄道で稼働していたB型客車15号の修復作業に取り掛かっています。B型客車15号は木造車両であることが最大の特徴であり、弱点でもあります。台枠を始めとする主要構造が部分的に腐食したり、火災に遭遇したりしており、強度的に充分ではない所があります。

そのため、台枠及び台車を設置する横梁は、根利の山から切り出した木材で新たに制作することにしました。部材としての整形や組立ては沼田市に在住する大工さんたちに技術的支援を仰ぎながら進めているところです。

特に、側面には客車の主構体を形成するトラス構造が設置されており、これはオリジナルの材料をそのまま使用することができました。

完成までには更に1年から2年程度を要するかもしれません。ゆっくりですが確実に修復してゆくことに喜びを見出しながら続けて行くことがこの活動の良い所と確信しています。

皆様、お近くにお越しの際は是非修復中のB型客車15号をご覧いただきたくお願い申し上げます。



写真1. 修復作業前、林業機械化センター親機館に收容されたB型客車15号。側面のトラス構造が観察できる。  
P: 木村一博



写真2. 台枠を組み立て、床を張り、柱、側面主構造、屋根根までを組み上げ、そして台車を履いた。やっと車両らしくなった。第6回根利森林鉄道まつりでは、雨にもかかわらず、大勢の人に修復過程をご覧になっていた。P: 木村一博

総務課から

### 研修所庁舎の耐震工事について

森林技術総合研修所では、現在、庁舎の耐震工事を実施しております。工事期間中は、研修生並びに講師の皆様には、大変ご迷惑をおかけしますが、ご理解、ご協力をお願いいたします。なお、工期につきましては、1月末までを予定しております。



\*\* 連絡先 \*\*

森林技術総合研修所

[http://www.rinya.maff.go.jp/j/kensyuu/kensyuuu\\_zyo.html](http://www.rinya.maff.go.jp/j/kensyuu/kensyuuu_zyo.html)  
〒193-8570 東京都八王子市廿里町1833番地94  
TEL 042-661-7121 (代表) FAX 042-661-7314

林業機械化センター

[http://www.rinya.maff.go.jp/j/kikai/kikai\\_ka\\_senta.html](http://www.rinya.maff.go.jp/j/kikai/kikai_ka_senta.html)  
〒378-0312 群馬県沼田市利根町根利1445  
TEL 0278-54-8332 (代表) FAX 0278-54-8280